

## 聖書が語る希望

### マルコによる福音書 14 章 3～9 節

今年度キリスト教基盤研究室では、聖書に親しむシリーズを企画しました。第 1 回として、7 月 16 日（金）、東京 Y W C A 会館およびオンラインにて「聖書が語る希望」～生きる意味について聖書から学ぶ～について増田琴牧師（日本基督教団経堂緑岡教会）からお話を伺いました。

マルコによる福音書 14 章では主イエスの受難の物語がはじまります。3～9 節は、一人の女性が、重い皮膚病の人シモンの家で、食卓についておられる主イエスに近寄り、突然石膏の壺を割り、香油を注いだという物語です。「ナルドの香油」といわれる極めて高価なもので、おそらく、持っている中で最上のものでした。弟子たちをはじめ、そこに居合わせた人々は、なんとという無駄遣いをするのだ。その油を売って、貧しい人々に施すことができるのにと、憤慨して非難をしていました。ところが、主イエスは「そのままにさせておきなさい」と言われました。なぜでしょう。

ここには二つの価値観が存在します。一つは彼女の行為を無駄遣いとする、お金という物差しで換算する考え方、行いや活動、場合によっては存在すらも数値で換算する価値観です。他方、この女性が差し出しているのは合理性でははかることができない、主イエスへの主体的な愛の行為そのものです。

この女性はすでに、自分の生き方を変えられるほどの主イエスとの出会いがあったのでしょう。周囲の価値観の中で自分を受け入れられず、傷つけていたのかもしれませんが。

「いのち」を神に与えられたいのちと考える時に、自分を大切にすることを学びます。私が考えていること、私の経験、私の痛み、私のすべてはかけがえのないものであることを知ります。それは他者への愛となって、神に呼応する者となるということです。愛とは、他者との関係性の中で生きることにはほかならないのです。

神は私たち一人ひとりに呼びかけておられます（call）。イエス・キリストによって、その呼びかけは具体的に見えるものとなりました。その呼びかけに対して、私たちは責任（responsibility）をもって応答し

ます (response)。神の呼びかけに応じて新しく生きようとする事、この転換を聖書は「悔い改め」といいます。

その女性の行為を、主イエスはやがて訪れるご自分の葬りに寄り添うものとして、迎え入れられました。

さらに「はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるであろう」と言われました。

私たちの人生において、無駄とは何でしょうか。周囲にいた人々は彼女の行為を「無駄」だと考えた。けれどもイエスはその行為の中に「いのちを支える」わざ、感謝と応答の意味を汲んでいる。それはかけがえのない、「記憶される」ものだと宣言しました。

私たちの生、言葉、行いは神によって用いられるという約束でしょう。それがどのような形になるのか、その時にはわからないかもしれない。無駄だと見えるかもしれない。けれども、それは神の国の来る時に明らかになるという希望を私たちは与えられています。

今、私たちは新型コロナウイルスの感染、大きな自然災害、戦争によって尊い命が失われている世界に生きる希望を失いそうです。香油をもって駆け付けたあの女性も生きる苦しみの中で希望を失っていたにちがいありません。しかし、主イエスとの出会いによって、この世の苦しみを超えた先にある希望を見ました。希望とは神の国の到来の約束です。聖書が語る希望です。

文責 大川孝子 (キリスト教基盤研究室)